

私と超音波

植木敏晴

福岡大学筑紫病院消化器科



[略歴]

- 1985年 3月 福岡大学医学部卒業
- 6月 福岡大学医学部第一内科入局
- 1987年 6月 福岡大学病院救急部
- 12月 福岡大学第一内科
- 1992年 12月 福岡大学筑紫病院消化器科
- 2002年 4月 福岡大学筑紫病院内視鏡部助手
- 2004年 4月 福岡大学筑紫病院内視鏡部講師
- 2009年 4月 福岡大学筑紫病院消化器科講師
- 10月 福岡大学筑紫病院消化器科准教授

私は、一九八五年に福岡大学第一内科に入局し、研修医で内科全般を学んだ後、肝臓グループに所属しました。そこで「超音波」のパイオニアのお一人である坂口正剛講師（現秦病院）に出会い、超音波の基礎から臨床まで幅広く教えて頂きました。一九八八年に日本超音波医学会に入会しましたが、先生の尽力で当時から教室には電子スキャンを装着した東芝社製の最高級の超音波診断装置があり、恵まれた環境で、B-モード画像だけでなく、カラードプラ法を含めた体外式超音波検査（超音波検査）を学習することができたことに大変感謝しています。超音波検査は、その優れた空間分解能から肝胆膵領域の慢性疾患や癌の早期発見には不可欠ですが、超音波画像と病理組織所見との対比から超音波画像の成因を解明するなどといった臨床と直結したテーマを研究できる「超音波」というmodalityに魅せられました。また画像診断だけでなく、肝腫瘍生検やPEI（PEIT）、PTBD、PTGBDといったinterventional ultrasonographyは「超音波」の奥の深さ、無限の可能性を感じさせました。その後肝疾患の他に胆膵疾患に興味を持ったこともあり、先生の御推薦で二年間、福岡大学第一外科の池田靖洋教授（現福岡大学名誉教授）、眞栄城兼清講師にERCPを中心とした胆膵疾患の内視鏡診断と治療について御教授して頂きました。EUSはもちろんのこと、内科とは異なったPTBDのテクニックも大変勉強になりましたが、胆膵疾患も「超音波」のノウハウが重要であることを再認識させられました。

一九九二年から福岡大学筑紫病院消化器科に移動後、一九九四年に超音波専門医を取得し、超音波検査を応用した肝細胞癌に関するテーマで学位を取得しました。現在も外来・病棟の超音波検査を担当していますが、最近には特に胆膵疾患を中心に画像検査や低侵襲治療を行っています。画像検査には「超音波」が不可欠ですが、EUS、ERCP下IDUSなどのB-モード画像の他に、超音波造影剤を用いた造影超音波検査を積極的に応用しています。CTやMRIの進歩は目覚ましいものがありますが、低侵襲で空間分解能に優れた「超音波」は、新しい造影剤や生体組織の硬度を客観的に表現する方法などの新技術の開発とも相まって、これからも画像検査の中で確固たる地位を築いていくでしょう。

最後に今後も「超音波」に深く関わっていく所存ですが、臨床医に「超音波」の魅力、可能性、発展性を理解していただき、多くの超音波専門医を育成したいと思います。